



『口吉川の歴史』（新三木市史地域編6）（時評・書評・展示評）

本井，優太郎

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 13:137-144

(Issue Date)

2021-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013403>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013403>



書評..『口吉川の歴史』 （新三木市史地域編6）

本井 優太郎

一

自治体史編さん事業において〈市民・地域住民（以下、原則として市民と記す）^① 目録〉の重要性が喚起されるようになって久しい。それが昨今の自治体史の一主流を形成していることは、web版、辞書や手引きのような体裁、特定の地域に特化した内容など、市民の存在を意識した自治体史が二〇〇〇年代以降にあいついで刊行されていることから読みとれる。^②そして、そうした〈市民目録〉の自治体史の筆頭格のひとつが、香寺町史『村の記憶 地域編』（二〇〇五年刊行）に代表される、市民が執筆・調査者として主体的に

自治体史編さんに参画する方式だろう。

本書『口吉川の歴史』（新三木市史地域編6）。以下、原則として本書と記す）も『村の記憶』の系譜につらなる自治体史といえる。地域編専門委員長（市史編さん副委員長兼任）の奥村弘氏によれば、『新三木市史』は、通史編、資料編、地域編の三つの編から構成され、このうち地域編については「市民の皆さん自身に調査、研究、執筆していただくことで、地域の歴史を深く捉え、地域歴史文化の次世代への継承にいつそう主体的に関わっていただくこと」を目的とし、「歴史的な関連の強い、志染・緑が丘・三木・吉川・青山・細川・別所・三木南・自由が丘の一〇地区に分け」て刊行することである（序文「地域編の意義について」）。本書はかよう



三木市史編さん委員会編
『口吉川の歴史』（新三木市史
地域編6）

三木市
2020年3月発行
B5判 462頁
価格3,000円（税込）
※購入方法については三木市の
ホームページ（組織→市史編さ
ん室→既刊刊行物）を参照

な地域編の初発となるもので、委員・事務局の双方にとって今後の指針となるものと推察される。構成はつぎのとおりである。

二

- 序章 口吉川編の取組
- 第一章 口吉川の位置と環境
- ①口吉川の自然環境／②産業／③自治会
- 第二章 口吉川の歴史
- ①原始・古代・中世の口吉川／②近世の口吉川／③近代の口吉川／④現代の口吉川
- 第三章 口吉川の生活
- ①年中行事／②講関係／③買い物／④子どもの遊び

- 第四章 口吉川の歴史文化遺産
- ①寺社／②記念物／③建造物／④民俗／⑤文芸／⑥伝説／⑦その他

- 第五章 口吉川を彩る人々
- ①稲見学園／②稲見俊春／③土居源三郎／④中野惟克／⑤水野正己／⑥常深千里
- 第六章 資料・統計編

それでは本書の内容を簡単に紹介していこう。あわせて評者の所感も付しておく。まず「序章 口吉川編の取組」では、口吉川部会の発足の経緯や活動を紹介するとともに、地域編の趣旨や史料整理の状況について言及する。本書によれば刊行までに約一〇〇〇点の史料の整理が完了しているとのことである。ただし内訳は明示されておらず、収集史料（群）の一覧なども付されていない。これらの情報は本書を読み進めるための前提となるものであるから、本章もしくは第六章「資料・統計編」に掲載していただきたかった。

「第一章 口吉川の位置と環境」では、①「口吉川の自然環境」、②「産業」、③「自治会」の三節を置く。①では地形・地質や動植物について、豊富な図版をもとに解説している。②では養蚕業、山田錦の栽培、「里脇ぶどう園」、酪農業の各業種について述べる。③では口吉川町内に存在する一五の自治会の地域区分の由来を記したうえで、各自治会の活動や地勢を解説する。

まず①・②については、たとえば②の主題のひとつである

山田錦の栽培に関しては①でも言及するなど、両節の相互関係には一定の配慮がなされている。とはいえ両者の叙述のスタンスは、①Ⅱ自然地理・生物、②Ⅱ地域産業・経済（史）と大きく異なり、あまり相性はよくない。とくに②については、本来的には第二章「口吉川の歴史」の領分であるはずの歴史の展開にまでふみこんだ叙述が散見され、「位置と環境」という本章の守備範囲を超えてしまっているようにみえる。以下は評者個人の見解であるが、自治体史において産業・経済分野の叙述は、よほど現状分析に特化した内容でない限り、〈通史パート〉の一部もしくはその後に続く〈各論パート〉に配置するのが、順序としては穏当ではないだろうか。しかし、本書では〈通史パート〉である第二章に先だって配置されている。そのため、口吉川の概説的な歴史に触れるよりも前に、養蚕や稲作などの具体的な歴史と対峙することになり、やや当惑してしまった。

③は各自治会とも類似したトピック（小見出し）を列記し、内容が似通っている箇所もすくなくない。一見すると〈金太郎飴〉のようである。しかし微細に立ち入ってみると、自治会によって微妙な違いがあり、なかなかおもしろい。こうしたミクロな次元の差異は地域の具体的なすがたを知ることが

できるのが地域編の醍醐味のひとつだろう。反面、小見出しの配列や叙述が機械的なきらいがあるのも事実である。なかにはわずか一〇二行の叙述しかなく、立項の必要性をさほど感じないトピックもある。たとえば、強調すべき点を中心に小見出しをつけて他は概説的にまとめ、自治会ごとの個性を際立たせる方法もありえたと思うが、いかがだろうか。

また、本節で挙げられているトピックのうち「商店」、「子どもの遊び」、「小祠・お堂・講など」、「地域の氏神社・檀那寺」などの叙述に関しては、後の第三章「口吉川の生活」や第四章「口吉川の歴史文化遺産」で言及・詳述されているものも多い。これは本節にかぎった話ではないが、他章で再出する個人・団体・施設・できごとに関しては、できるだけ該当頁数を明記して〈紐付け〉をしておいたほうが読者の便宜に資するだろう。

「第二章 口吉川の歴史」では、原始〜現代にいたるまでの口吉川の歴史を叙述する。まず、①「原始・古代・中世の口吉川」のうち原始〜古代については、『オケ・ヲケ』伝説「法道仙人の寺院開基伝説」などの伝説や遺跡が紹介される。いっぽう中世では口吉川地域の荘園の解説に続けて、区有文書から発見された「大塚郷山之由来」をとりあげる。加えて

同史料の性格や各条の内容についても詳述している。

②「近世の口吉川」では、三木地域の領主と村々の概説、同地域で発生した水論・山論のありよう、寺子屋での教育の様子などについて叙述する。このうち水論・山論に関する叙述においては、証文などの史料をもとに、各時期に発生した事例を詳細かついねいに跡づけており、非常に読みごたえがある。文章が平易明快であるうえ個々の論証の精度も保たれており、門外漢の評者でも最後まで興味ぶかく読み進めることができた。本書のなかでもとりわけ歴史叙述としての完成度が高い箇所といえる。

③「近代の口吉川」・④「現代の口吉川」は、それぞれ明治維新ないし敗戦・戦後改革から叙述がはじまる。近代行政村の成立、養蚕組合の設立と活動、耕地整理事業、豪雨による災害、三木市の誕生、新制中学校の発足、青年団活動、公民館の開設、ゴルフ場の開発、福祉施設の開設など、約四〇項にわたって口吉川のできごとを取りあげておりバラエティに富む。ただ、各項の配列の意図が見出しづらく、やや羅列的な印象をうける。そのため、近現代史に不案内な人にとつては節全体の展開をつかみづらくなっているのが残念である。時期（Ⅱ明治期、大正期、昭和戦前・戦時期、占領・復興期、高度成長期など）ないしテーマ（行財政・産業経済・社会生活・教育文化など）ごとに項を編成したうえで、そうした方針が明確に伝わるような項題を付すなど、構成面においてももうひと工夫が必要であったとみる。

構成の問題に関わって、各章の末尾に収録されているコラム「声を出して読むふるさと口吉川こぼれ話」にも言及しておきたい。これらは口吉川にまつわる伝説・伝承や資料の紹介など興味ぶかい内容が多くふくまれている。しかし、第二章ことに③・④に関していえば、本文との住みわけが必ずしも適切でないと感じた。以下、すこし立ち入ってみよう。

③・④に関わるコラムとしては、それぞれ「大島地区の記録―大正から昭和へ―」と「青年団活動の思い出」の二編がある。前者は大島地区に残されていた『決議録』と『記録綴』の紹介である。大正と昭和にかけての地区運営に関する決議事項などが記されているほか、昭和恐慌への対応や一九三二年の水害に関する記述もある。いっぽう後者は戦後の青年団活動に携わった市民の回想録であり、活動の概要や思い出などが綴られている。両稿がコラムに配置されているのは、純粹な歴史叙述というよりは史料紹介に軸足が置かれているからだろう。とはいえそこに綴られている、あるいは語られて

いる内容は、いずれも近現代の日本ないし三木地域の社会状況の具体相の好例といえないだろうか。してみると、これらはやはり本文に配置するのが妥当であろう。とくに水害や戦後青年団については本文でも立項しているので、事例として存分に活用できたように思われるが、該当箇所を読むかぎり明確な言及はなされていない。

いっぽう本文で目をひくのが、③に収録された「須磨の仇波」の項である。これは美囊郡の富豪の家に生まれた女性・土居愛子が淡路島の豪農の家に嫁いだもののなじめず、心身ともに疲弊して追い詰められた末に、船上から愛娘を抱いて須磨の海に投身したという、大正期に起こった悲劇を主題とする。非常に印象に残る話ではあるが、叙述じたいは土居の生い立ちや心情に添ったパーソナルな趣となっており、当該期の日本や地域を特徴づけるできごととは読みづらい。結果的に本文のなかではやや浮いた存在になっている。コラムに配置したほうが違和感はすくないだろう。

「第三章 口吉川の生活」では、①「年中行事」、②「講関係」、③「買い物」、④「子どもの遊び」について記す。大別すると①・②は民俗、③・④は日常生活にまつわる市民の経験史といえよう。評者は③にとりわけ強く惹かれた。この節

では「昭和堂ストア」や「岡田ストア」など、かつての地域商店の写真や位置図などが盛り込まれている。市民の口述を史料として用いている点もあいまって、文字どおり「地域の記憶」を再現するかのような、あるいは読者が当時の状況を追体験できるような妙味のある内容となっている。

なお口述史料の用法について一言すると、本章では基本的に引用はおこなわず、著者の地の文に直して叙述しているようである（例外的に③の最終項のみ口述の引用・例示が大部分を占める）。ただしオーラル・ヒストリーの作法としてみると、このような方法は論証の視認性という点で問題があると評者は考える。掲載の可否については話者の意向が最優先であるのはいうまでもないが、市民の生活経験を紹介するという本章の趣旨もふまえるならば、口述をより積極的に引用する選択肢があってもよかつたのではないか。

「第四章 口吉川の歴史文化遺産」では、口吉川の地域歴史遺産を紹介している。大部分を占めるのは寺社（①）であり、位置や由緒、催しなどについて詳細に説明している。さらに本章では、記念物や建造物（②・③）のほか、民俗・文芸・伝説（③・④・⑤）についても関係文献や資料をもとに叙述している。章のタイトルが「文化財」ではなく「歴史文

化遺産」となっていることから、口吉川の歴史文化を考え
るうえで欠かせない有形・無形の遺産を網羅的に提示しよう
とする意図が伝わってくる。

「第五章 口吉川を彩る人々」では、各方面で功績をあげ
た人物の経歴と功績を記す。①近世後期の庄屋であり学問家
の稲見学圃、②宮中歌道の権威である冷泉為紀を師に持つ歌
人・稲見俊春、③地域の殖産興業に尽力した初代口吉川村長・
土居源三郎、④収入役・助役として源三郎を支え、のちに二
代目村長となった中野惟克、⑤明治後期の衆議院議員・水野
正己、⑥語学教材の開発に功を挙げた常深千里の六名をとり
あげている。

最後の「第六章 資料・統計編」では、近代以降の口吉川
地区の世帯・男女別人口の推移をしめた表が掲載されてい
る。その後には参考文献・執筆者・関係者の一覧、口吉川部
会員の〈あとがき〉、図版一覧がつづく。これらはおそらく〈後
付〉であろうから、本章は人口推移の表一点のみとなり、や
や寂しいものがある。先述した関係史料（群）の一覧表など
を掲載しておけば、もうすこし格好がついたかもしれない。

三

大要右記のとおりである。個別の批評は既に述べたが、そ
のほかにも、外部の執筆者による寄稿文や回想録がほぼ手付
かずと思われる体裁で収録されていたり、小見出しの表記が
不統一であったり（第一章③）と、ちぐはぐさが目につく（い
ずれも編集側が意図的にそのような体裁にした可能性は排除
できないが）。これらを総合すると、本書の完成度について
手放しで称賛することはできない。

ただし、本書のような市民主体の地域編のばあい、構成・
体裁の編集や校正作業にかかる事務局の負担が、通常の自治
体史刊行のケースと比べるとどうしても大きくなることを無
視してはならないだろう。評者が指摘してきた本書の問題点
とは、つまるところ、そうした負担の滲出・漏出にほかなら
ないのではないか。しかも本書にあつては、編集・校正に加
えて、執筆も事務局が相当量を分担している（執筆者一覧）。
これは、口吉川部会員や外部執筆者の筆がおよばない箇所を
事務局がカバーしたと理解すればよいのだろうか。だが、す
でに膨大な業務を抱え時間にも迫られるなかで執筆まで請け

負うのは、あけすけにいつて無茶であろう。これに関して、たとえば大学教員や学識経験者で構成されているであろう通史編担当の委員が、部分的にでも執筆に加わる選択肢はなかったのだろうか³。とくに本書のばあい、同じく市民が執筆した香寺町史『村の記憶 地域編』と比べると、全体にしめる通史的叙述の割合が多くなっている。両者の目次をみても、基本的に地区ごとに章割りをしている『村の記憶』に対し、本書はより一般的な自治体史に近い構成を採用している。これらの点にかんがみれば、通史編の委員が執筆に参画する余地は決してすくなくないと考える。この点、「市民の皆さん自身に調査、研究、執筆していただく」という本書および地域編の趣旨を尊重したうえで、あえて付言しておきたい。

さて、ここまで思いつくままに私見を書き連ねてきたが、当然ながらいささかも本書の意義を損なうものではない。その意義とは、口吉川部会員を中心に市民主体の地域編の刊行を成し遂げたという事実そのものである。執筆者一覧をみると、部会員をはじめとする市民の方々が第六章を除くすべての章の執筆に何らかのかたちで参画し、意欲と質量に満ちた叙述をされている。この事実ひとつをとっても、本書が市民主体の自治体史であることの証明たりうるだろう。各位のご

尽力に対して心から敬意を表したい。

さらに目をひくのが、本書がごく短期間のうちに成っている点である。序章によれば第一回の口吉川部会の開催は二〇一七年二月であり、そこから本書の刊行まではわずか三年余りしかない。通常の自治体史の場合でさえ、準備調査をふくめると一冊につき三〇五年を要する。ましてや本書は「参考になる類例がない」（本書二頁）地域編なのだから驚嘆するばかりである。それを可能にした最大の要因が部会員および事務局員の粉骨碎身にあろうことは論をまたない。さらに加えるならば、部会外の多くの市民も執筆者・史料提供者・調査者として本書の編さんに携わっていた点も重要であろう。とくに調査者については、ボランティアによる定期的な古文書整理や自治会を母体とした「地区調べのアンケート」の実施などのように（序章）、事務局と緊密に連携していることがうかがえる。地域に根ざしたネットワークづくりが地域編を成功させるための重要な力ぎであることを、本書を通じてあらためて痛感した次第である。

本稿では、おもに構成や体裁に関する所感を記してきた。そのため、本来の書評の眼目である論証の妥当性や論旨の整

合性については、ほとんど言及することができなかった。揚げ足取りに終始した感が否めないし、誤読や見当違いな批判も多いと思われる。ひとえに評者の力量不足のゆえであり、執筆者はじめ関係各位のご海容を乞うばかりである。市民主体の自治体史の刊行は、今後も各地でおこなわれるだろう。そうしたなかにあつて、本書および続刊の新三木市史地域編⁽⁴⁾は絶好のケース・スタディとなるに違いない。口吉川地区ないし三木市に在住する方はもちろんのこと、自治体史や地域史に興味がある方にも手に取っていただきたい一書である。これらの点を強調して筆をおくことにしたい。

註

- (1) 本稿ではさしあたり〈当該自治体の住民を中心とする市井の人びと〉というニュアンスで用いることにする。
- (2) 紙幅の都合上すべてを挙げることはできないが、三重県亀山市『亀山市史』IT版、二〇一一年、大阪府和泉市『松尾谷の歴史と松尾寺』二〇〇八年／『信太山地域の歴史と生活』二〇一五年など。いずれも『和泉市の歴史』シリーズ・和泉市史編さん委員会編・和泉市発行、尼崎市（『図節 尼崎の歴史』上・下巻、二〇〇七年および同web版／『たどる調べる尼崎の歴史』上・下巻、二〇一六年。いずれも尼崎市立研究史料館編・尼崎市発行）などの例がある。

- (3) 執筆者一覧によれば、通史編担当の委員のうち執筆に加わっているのは坂口隆康氏のみである（通史編専門委員兼同委員会自然地理部会長・二〇一七年三月時点。「新三木市史編さん事業の概要」『市史研究みき』第二号、二〇一七年を参照）。なお「新三木市史編さん事業の概要」に記載されているのは、通史編・地域編それぞれの専門委員会の委員（通史編の場合は各分野・時代の部会長を兼任）のみであり、委員会内に設置された各部会の構成員はわからない。また誤解のないように述べておくと、事務局員の執筆者としての力量不足をいいたいわけではない。たとえば第二章②を執筆された木村修二氏はれっきとした日本近世史研究者であり、同節の叙述が高品質であることも既述の通りである（もしかすると同氏は通史編の近世部会委員を兼任されているのかもしれない）。愚見はあくまで地域編を編さんするさいの負担の分散という観点からのものである点にご留意願いたい。木村氏のような研究者がスタッフに加わっておられるのは事務局にとって心強いことであり、執筆を担当するケースもあつて然るべきだろう。ただしそのばあいは、執筆と編集の分担が適切になされていることが理想かつ前提となる。
- (4) 本稿の脱稿後に『志染の歴史』（地域編4、二〇二二年三月刊行）に接したことを付言しておく。